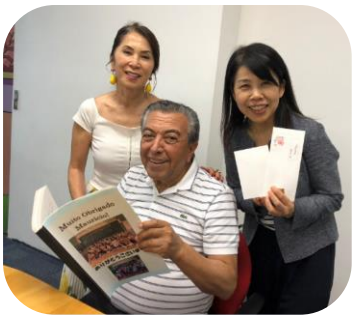
Por um futuro melhor

どの子の未来も明るくなりますように！　ブラジル通信 No.24 2018.12.20　学校教育課　鳥山徳子

子どもの手紙は「金（きん）」よりも価値がある！！



12月4日（火）マウリシオ事務所訪問

サンパウロにあるマウリシオデソウザプロダクション事務所へ訪問し、コミュニケーションスタンプとマンガが絵本「モニカ日本の小学校」寄贈のお礼を伝えてきました。また、国際教室の子どもたちが書いてくれたお礼の手紙も直接届けてきました。マウリシオさんは、「子どもたちからの手紙は、金（きん）よりも価値がある」と言って、１枚１枚目を細めながら読んでくださいました。「ベッドの横に置いて、毎晩読むのを楽しみにするよ」とも言ってくださいました。豊橋市の子どもたちにサインもいただいてきました。豊橋市役所１１階の相談コーナーに飾ってあります。子どもたちにも紹介をしていただければ嬉しいです。

マウリシオ事務所では、現在「モニカ日本の小学校」の中学校版や、ひらがな・カタカナカードも作成中です。完成したら、また多くの子どもたちに使ってもらえるようにしたいというお話も聞いてきました。寄贈していただけるようにお願いもしてきましたので、楽しみに待ちたいと思います。

どの子の未来も明るくなりますように！！（その1）

１２月９日に７４日間の日程を終え、初夏のブラジルから極寒の日本に戻りました。帰国当日は、小学校駅伝大会の翌日で、日本に寒波が訪れた日だったので、ほぼ真夏の格好で戻ってきた私は、すっかり日本の寒さに打ちのめされてしまいました。

○７４日間外国人として過ごしてきた私が、今思うこと

言葉が通じないことが、いかに孤独で、もどかしいかということです。通訳さんがいなければ、簡単な思いさえも伝えることができない自分に対する劣等感のようなものがいつもありました。そして、自分という人間を正当に評価してもらえないつらさもありました。文化の違いに戸惑い、「文化の違いだから」という言葉で片付けられてしまうことに対する腹立たしさもありました。自分の意思に関係なく日本に連れてこられ、日本の学校に通うことになった子どもたちの気持ちが、ほんの少しだけ理解できたような気がします。そんな気持ちを誰かに話したくても家族は働くことに一生懸命で、日本に来た途端、家族で過ごす時間は激減してしまいます。パラナヴァイ市の週末の公園で見たとても素敵な家族の姿は、もうどこにもありません。子どもたちは、そんな家族の変化をどのように受け止めているのでしょうか？その心を推察するとつらくなりますね。

○どうして大きな犠牲を払ってでも日本に出稼ぎに来るのか？

ブラジルの経済状況は、とてもよいとは言えません。１２か月働いても、５か月分が税金として取られてしまうそうです。一方で、刑務所に家族が入っていたり、子どもを学校に通わせたりすれば国からお金がもらえるという国の施策によって、働かなくても生活できる現状もあります。政治家の汚職も多く、賄賂が横行しているという話も聞くと、まじめに働くのが嫌になってしまいますよね。派遣会社が日本でまじめに働けば、ブラジルに家を建てることができ、車も買えるなど、よい話を持ち掛け、出稼ぎに来ているのでしょうか？昔と今では、出稼ぎに行く理由も変わってきているのかもしれません。マリンガの出稼ぎ協会やサンパウロの国際交流基金では、今の出稼ぎで日本に行く人は、とても気軽な気持ちで来ていて、だめなら戻ればよいという安易な考えの人が増えているという話も聞きました。それが事実かどうかは判断できませんが、そんな大人たちに振り回されるのは、紛れもなく子どもたちです。

Por um futuro melhor

どの子の未来も明るくなりますように　ブラジル通信 No.25 最終号 2018.12.20 学校教育課　鳥山徳子

どの子の未来も明るくなりますように！！（その2）

〇子どもたちの未来が少しでも明るくなるように、私たちにできることは？

① 国際教室の担当の先生方をはじめとした豊橋市の小中学校の先生方や、豊橋市教育委員会の相談員やＳＡの方々は、本当に熱心に子どもたちの指導や支援をしてくださっています。心から感謝いたします。特に、国際教室の担当の先生方は、日本語指導については初心者の方も多いですが、熱心に相談コーダー（リソースルーム）に足を運んで教材を探したり、日本語相談員さんに聞いたりして、子どもたちのためにがんばってくれています。また、その方々だけに任せるのではなく、「チーム学校」として、外国人児童生徒教育にも前向きに対応していただけていることに感謝いたします。

② ブラジルでは、信頼できる通訳の方の存在がどれだけ心の支えになるのかということも実感しました。バイリンガル相談員の方がここにいたら、どれだけ心強く、どれだけ思いを相手に伝えることができただろうと毎日のように思っていました。信頼できる相談員さんのいる豊橋市は、保護者も子どもたちも本当にラッキーで、幸せだと思います。補足ですが、この 10 年間で、外国人の子どもの数が約 1,000 人から 2,000 人に増える一方で、相談員さんの数は１人も増えていません。どれだけ相談員の方々ががんばってくださっているのかということが、この数字を見るだけでもわかっていただけるかと思います。単純に考えれば、２倍になった子どもたちの支援をするために、相談員の先生方の業務量は２倍になっているということです。相談員さんの増員は教育委員会としても毎年行政に訴え続けていることですが、やっと 30 年度に２名増員になったものの、まだまだ足りていない状況です。学校現場からも悲鳴が聞こえてきますが、まずは、相談員さんやＳＡの方々の限りある時間を、子どもたちの支援のために有効に使っていただきたいと思います。

③ ブラジルの文化や教育情勢を知ることの大切さも実感しました。日本の国土面積の２３倍もあるブラジルのどこから来たのか、そして、ブラジルではどんな学校に通い、どんな教育を受けてきたのかによって、子どものレベルは大きく異なります。私立の学校に通っていた子と、公立の学校に通っていた子では受けてきた教育にとても大きな差があります。公立の学校のレベルは、ブラジルでも高い教育を行っているパラナヴァイ市でさえ、まだ「席に着く」「静かに話を聞く」ことがやっとできるようになった段階です。教え込みの授業が多く、体験や操作活動、宿題の習慣もないので、学習の定着もそれほど期待できません。理科の授業では実験も観察もありません。そんな背景の中で育ってきた子どもたちの能力を日本語も話せない段階で正しく評価することができるでしょうか？その段階で、子どもたちの将来を勝手に決めてしまってよいのでしょうか？全世界で日本と同じように教育が行われているわけではないという当たり前のことを、思い知らされました。そんな視点をもって外国から来た子どもたちを見ていただければ、子どもたちはとても幸せだと思います。

④ おわりに

親の都合で子どもたちの未来が閉ざされるようなことがあってはいけません。少しでも、目の前の子どもたちが自分の将来に悲観することなく、前向きに夢を語れるような教育が今後も推進できるように行政の立場として、教員の一人としてがんばっていきたいという思いを強めました。初期支援校「みらい」での指導が成果を上げています。「みらい」を立ち上げたおかげで、中学校の先生方の外国人児童生徒教育への理解が高まったことは、予想外の「みらい」立ち上げの成果です。

外国の子どもたちは、言葉の面と文化の面で特別な支援を必要とする子どもたちです。そして、決して自分で選んで日本の学校に通っているわけでもありません。保護者の支援や対応はもちろん大変ですが、そんな視点で子どもたちを支援していただけることを心から願っています。

パラナヴァイ市からの作品は、1月中に連携学校にお届けします！